

第4分科会 第1分散会

はじめに基調提案及び本分散会の討議の柱が確認された後、隣保館、児童館、夜間中学・相談支援センター、NPO法人、行政の立場からの5本の報告をもとに、質疑、討論が行われた。

1 報告及び質疑、討論の概要

近年の就労環境の変化にともなう非正規雇用者の増加などにより、格差社会が進行・拡大し、「不安定就労→貧困家庭の増加→十分に教育が保障されない子どもの増加」の連鎖が、被差別部落内外を問わず顕著になっていることや、人権・同和問題意識調査等から周辺地域の同和問題に対する無知・無関心の現状が変わらずにあることが明らかになった。このため、各行政機関や人権・同和教育連絡協議会等の各種の機関・団体での学習・啓発の取組や市町村全体への啓発として「人権フェスタ」や「差別をなくすつどい」の開催等、市町村の取組が報告された。また、そのような場で子どもたちが自分をみつめ、共に生きる勇気を高めるために、子どもたちが自分の学びや思い、がんばりを語る住民集会を設定した報告があった。しかし、子どもたちの豊かな出会いや育ちの保障を阻んでいる厳しい地域の実情の中で、子どもたちが自分を語るためには、関わる教師や指導者、行政職員が子どもと仲間のつながりや子どもの生活背景の現状をどのように捉え、子どもと関わることを通して、どんなことを学び、実践しているのか、したのかなどの生き様や人権意識を併せて発信する必要があると確認された。

一方、学校・園・所、家庭、地域、社会教育関係機関・団体、医療、福祉の関係者等で構成する組織がつながり、子どもたちを支え、子どもたちの語り、育ちを保障するためのコーディネート機能の必要性について討議された。特に、介護事業や夜間中学で出会った子どもに寄り添い、その後も関わり続ける相談支援センター職員の報告では、課題が重複する人ほど行政の相談窓口が狭く、現在の福祉行政では支援が困難な現状が明らかにされ、地域福祉の推進と共に、医療、教育等、多様な啓発主体と連携した総合的な支援が当事者、職員ともに必要であることが確認された。

続いて隣保館からの報告の討議をとおして、過去「関係機関と連携調整を図り、制度や対策を必要とする地区住民につなぐ役割」や「ひとりの課題を地域の課題として捉え、その解決を図る活動をとおして部落問題の解決」を図ってきた隣保館機能の重要性が改めてクローズアップされた。特に、隣保館が蓄積してきた地域福祉の手法や隣保館が核となって行政、教育、関係機関・団体等との連携、調整機能を果たす「つながりの再構築」や「総合相談活動と自立支援の取組」への役割に大きな期待が寄せられた。

また、「就労—貧困—教育」連鎖に追い込まれている地区外の子どもの含めた新しい子ども会活動が報告され、共に支える環境整備の必要性が確認された。それはまた、少数点の被差別部落では、今、高齢化が進み限界集落に近づきつつある現状もあり、子ども会活動は、部落外の子どもの含めた子ども会活動に転換するのは必然の状況でもある。そのような現状下での子ども会の具体的な実践として、地域の祭りや敬老会、介護施設等を訪問して子ども会で学んだことや、解放への思いを、和太鼓演奏に込めた演奏活動から、子どもたちと地域の人々との絆が生まれたり、お互いに支え合う仲間が育っていったりしたとの報告があり、

被差別部落から外に打って出る（発信する）新しい子ども会活動の創造の必要があると確認された。

さらに、障害がある者と障害がない者が共に生きることをめざして、障害がある者の位置から「社会規範、価値観と言われるものは、常に大多数を占める障害のない者の位置で決められている」等の提起があった。また、障害を「できる、できない」で捉え、障害がある者の変化や努力に求めるなど、障害がある者の声は届いていない。それは、障害がある者と障害がない者が、お互いを知り、理解し合うための触れ合う機会、場所があまりにも少なく、結局、障害がある者の学ぶ機会が奪われている社会的状況に基づくものがある。そのため、作業所やグループホームでは、障害がある者だけの施設でなく、介護・職場・ボランティア体験等の受け入れや学校等の学びの場として様々な人を受け入れ、人と人をつなぎながら共に生きる学びの場としての役割を果たしている報告があった。

総括討論では、報告者の「障害がある者（私）も支援される時もあれば、人を支える時（私たち）もあり、地域で共に生きる障害がある者もまた『私と私たち』の位置ある」との双方の立ち位置からの提起について、意見の交流があった。

また、学校・園・所、家庭、地域、社会教育関係機関・団体、医療、福祉等の組織及び関係者等々、全ての人々が共に「差別をなくする位置」に立った連携、そして連携を生み出すコーディネート機能の存在の必要性等について活発な討議があった。

2 残された課題

子ども会や学校で学んだこと、思いの語りや立場宣言をした子どもたちを支える仲間や教師、指導者集団の学び、ありようなどの語りが少ない。

また障害が重複している場合、行政、教育、医療、企業等の各組織、職員が対応できない状況がある。

さらに社会教育の最先端にある公民館から今回は報告や意見等がなかった。公民館は、戦後、社会教育主事を配置し、地域の課題を地域住民が解決を図る場として急速に建設されたが、今、カルチャーセンター化しているとも言われている。また公民館のほとんどは被差別部落外に設置されているが、この位置からも人権教育・啓発の拠点として、また行政、教育、関係機関・地域団体等への発信機能を生かして、その連携、調整機能等を積極的に果たす責務がある。今後の取組に期待したい。

報告で「差別は人の心を殺すといっしょだから、絶対にしてはならない」と叫んだ子どもの声があった。そして、参加者が「共に意見を出し合い、理解していく、こんな場がここ（全人教）にある。素晴らしい」と語った。本分散会の参加者は、こんな大会で学んだ研究、実践と解放への熱を礎にして、それぞれの地で、人権が普遍化した町（地域）づくりの研究・実践をさらに進めるとの決意を深くした。

第4分科会 第2分散会

本分散会では、4本の報告があった。

岡山の報告からは、「障がいを持つ子、持たない子」が、共に学び合いながら育ち合うことの必要性と大切さを学ぶことができた。「おもちゃ図書館」を通して、子どもたちが共に育つ場をつくり出している取組だったが、その中には、そこにかかわる大人一人ひとりに熱い思いがあった。報告者自身も、子ども時代に病気がちということで、先生たちから声もかけられなかったり、放っておかれたりした寂しさを経験し、「学校は嫌いだった」と語られた。その思いは、学校の中で、地域の中でポツンと置いておかれている、障がいを持つ子どもたちの思いに重なり、その事が取組の出発点になっていたことが見えてきた。また、障がいを持つ子の親として、活動を通して自分の中に「かべ」があったことに気づいていく。そのために突っ張って生きてきたが、活動を通して、自分から話していかなければ分かってもらえないというパワーが湧いてきたこと。その変わり目は、障がいのあるなしにかかわらず、子育てが共通項となり、互いの助け合いが生まれるようになったこと。また、地元の学校に通い続けた子どもの存在は、一人の教育課題から出発した仲間づくり・学校づくりを進め、それが子どもの育ちの保障、共生の実現につながることの裏付けである。その一方で、同級生の中に入りづらかったという子どもの存在は、現在も続く学校教育の課題を克服するための、同和教育の力と必要性を再確認することにつながった。

愛媛の報告からは、同和教育の確かな視点を持った子育て支援の取組は、解放運動につながっていくことを学んだ。報告の中で、30年前に起こった差別事件のことが語られた。差別が目の前で起こるとは全く思っていなかった。だから部落問題も学んでいなかった。参加者からも、発言した子や親には取り組んだが、肝心の当事者には伝えることができなかったという痛恨の思いが語られた。これは過去の話ではなく、現存する部落差別の現実そのものであり、差別を受け傷ついた当事者を放っておくことで傷を深めていく、二重の差別である。一番しんどいところに思いを寄せられる、それが同和教育そのものである。どれだけ学んでも一歩進んでは二歩下がると語る報告者は、心の中の葛藤を差し出され、そこに差別の厳しさを突きつけられた。厳しい差別の現実の中で、たった一人の熱い思いから始まった解放運動が、着実に人と人とをつないでいる事実を通して、同和教育の確かな視点を学ぶことができた。そして、その実践がこれからの運動のあり方に、大きな示唆を与えてくれた。

香川からは、解放子ども会の活動がていねいに報告された。差別に立ち向かっていくための学びとして、社会的立場の自覚をすすめることは不可欠だが、その子どもの周りには、それを伝えた後も子どもを見守る学校や地域の存在がある。地域の歴史を先輩から聞き取り、差別の現実の中でつくり上げてきた運動やそこに込められた思いを、自分たちが受け継いでいくという活動を、丁寧に積み重ねていくことが重要である。議論の中では、被差別の立場にある子どもたちに力をつけること以上に、差別をする側の子どもたちにこそ、確かな学びが必要であることも確かめ合った。今だからこそ、解放子ども会の存在意義が強まり、全国的な課題として問われている。

滋賀の報告からは、その意義をさらに具体的に学ぶことができた。学校の、教師の冷た

さに「一緒に考えてほしかった」という思いが語られ、会場からはそれに何かを返したいという思いがつながっていった。そして、なぜこんなに苦しまなければならないのかという、差別に対する怒りを参加者が共有していった。報告者自身が語っていたように、差別をなくす運動に参加していなければ、誰にも言えず一人で抱え込んでいたかもしれない。つらい状況の中でも、自分が発信することで前に進むという言葉の中に、解放運動や同和教育運動の確かな手応えをつかみ取ることができた。何かがあった時だけでなく、日常的に活動する場としてのネットワークが大切であり、そこには支えてくれる仲間が存在がある。だからこそ、自分の思いを伝えることができるという意見が続いた。

4本の報告を通して、子どもにも大人にも、安心して自分を語れる場（居場所）が必要であることが繰り返し論議された。子育てサロンも子育てネットワークも、子ども会活動も、子どもたちや親にとって、それぞれの日常の中にあってこそ、力を発揮することができると確認できた。2日間の討論は、温もりのある討論だった。それぞれが当事者として、自分自身に向き合ってきた報告や論議だったからだ。自分自身に向き合うということは、当事者としての自分を、差別の中にいる自分を自覚すること。そこから出発した取組は、どんなに萎えそうになっても、負けそうになっても、折れないと確信できた2日間だった。

まだまだ現存する学校現場の冷たさや、差別意識のある地域の中で、弱者が社会から排除されていく現実がいかに立ち向かっていくかが問われ続けた2日間であった。運動は一人ではできないが、一人からでも始められることがあるということを、本分散会で確認することができた。

第4分科会 第3分散会

部落差別の解決は、被差別・加差別の関係性を克服することであり、ともに手をつなぐことこそが展望である。関係性をつくるためにも、「地域づくり、組織づくり、人づくりをすすめる、地域の教育力を高める」という分科会テーマを柱にしながら、4本のレポートをもとに討議を重ねた。報告から総括討論まで、3つのキーワードをもとに分散会での声をまとめる。

1. 出会い

「どうしても自分の身体のことを言えなかった。でも、仲間があれだけ話してくれたら、やっぱ言わなんかなと思った」

「自信をもってムラのことや自分の思いをしゃべれるようになった。そのことで人間関係が広がっていった」

「母親がわが子の教室で、自分の結婚を語り、自分の子が部落の人であると語った。その言葉を受け止めた子どもたちは、部落差別を自分事として考えていくことで返していった」

「地域内の子と地域外の子が、どうすれば部落差別をなくせるかを真剣に語り合う姿に心を動かされた」

「立場を隠さずに語ることで、カミングアウトすることで、差別をなくす関係を広げていくことが、今だからこそできるのではないかと。地域からそんな出会いを発信していくことが求められている」

私たちが大切にしてきた出会いは、顔を合わせるだけでなく、ともに時間を過ごし、お互いの思いを伝えあい、その思いを共有することである。そして、出会った意味をそれぞれが見出し、確かな出会いとして、深めていくことである。

子どもたちを反差別の主体者として立たせていく上で、親の願いを知り、その願いを受け継いでいく。そのために、子どもたちにストレートに迫ってくれる人に意図的に出会わせる。子ども会や社会教育に関わる私たちが、そんな確かな出会いを意図的に生み出せているかということが確認された。

2. 居場所

「子ども会や地域がめざすべきものとして、何があっても、この仲間がいるからと思える場所をつくっていききたい。子どもたちにとって、そう思える仲間のひとりでありたい」

「地域内外の枠をこえて、差別をなくす輪を広げたい」

「年代を越えて、語り合いを重ねることで、関係はつくられていく。若い世代の熱さが出せる、その熱さを大切にできる地域をつくりたい」

「学校で子どもが本音を伝えあえる場所をつくりたい」

「子どもの暮らしの中で起こる気になることを、ひとつひとつ取り上げて話し合っていきたい」

「地域のよさを伝えることは、その地域の人を好きになるということで、『このおっちゃん、おばちゃんが好き』、そんな子をつくっていききたい」

「親子だからこそ言えることもあれば、言えないこともある。親に言えないことをつぶやける。そして、気持ちを整理して一步踏み出せる場にしたい」

「仲間が帰ってくることができる。思いを出せる場所にしたい」

「差別が昔よりも見えにくくなっている分、出身であることを声に出せない、言いにくくなっていることも差別の現実。そのことで悩んでいる。何かあったときに言える場をつくっていくことが、この先、必要になる」

子どもたちに「このムラを好きになってほしい」という思いには、「このムラで生きる人たち、そこにいる私も含めて好きになってほしい」という願いが含まれており、居心地がよいだけに終わる場所でも、単なる場所ということではない。居場所は、そこに人がいるからこそ成立するものであり、人と人との関係性によって作りだされていくものである。

子どもたちの主体性や思いを引き出すために待つこと、思いを出せる雰囲気をつくること、自ら語り出せる場をつくること、これらを大切にしながら、子どもたちとの関係性や居場所をつくっている青年たちの姿があった。

子どもたちは、様々な出会いをとおして変容していく。しかし、子どもたちの歩みや生活の中に差別の現実がある。そのときに、語り合い、ともに考え、行動する仲間を実感できる居場所づくりを、これからも大切にしたいこととして確認された。

3. 社会的立場の自覚

「ムラに生まれたことではなく、ムラを隠さない生き方を誇りに思う」

「わが子に、差別を受ける側にも、する側にもなって欲しくない、差別を許さないという思いで生きていって欲しいと、自分の生き方としての背中を見せてきた」

「子どもを起こすだけではなく、出身であることを納得し、部落問題とどう向き合うか、解決のために何ができるかという展望を伝えたい」

「立場を伝えることは親の責任でもあるが、すべての親が伝えられるわけではない。そのときに、生きてきたムラの人たちがいる。そんな人材を活用すればいい」

「親、地域、学校がひとつになって自覚させていきたい」

「できることなら親から伝えてほしい。伝えられない事実もあるので、親と話し込み、自分たち青年から、その子に伝えた」

「出身であるなしは関係なく、地域外でも、結婚の際、親が反対し、差別をすれば、被差別当事者になる。だからこそ、横のつながりを広げていっている」

「自分も差別を受ける立場になるかもしれへんから、と自分事として捉えられる仲間を増やしていきたい」

「子どもたちには、仲間とつながることの大切さを伝えたい」

差別の現実を前に、不安やしんどさを語り合える仲間とのつながりは、差別と向きあっていく原動力になる。そんなつながりや生き方を示していくことは、子どもたちに展望を届けていくひとつの取組である。

子ども会や高校生友の会に参加している子どもたちの中には、部落出身ではない自分が活動に参加してもいいのかと悩む子がいるという現状も届けられた。社会的立場の自覚は、部落出身の子どもたちに限ることではない。結婚の際に、親が反対するかもしれない。そのときにどう行動できるか、あるいは、自らが部落問題とどう関わっているのか、自分の

立ち位置はどこかなど、子どもたちが、自分の立場を自覚できるよう、差別をなくす主体者として育てていくことが必要であることが確認された。

子ども会で育ってきた青年が、地域の願いや思いを受けとり、次の世代にバトンを渡していく姿が、同和教育で大切にされてきた子ども会活動の成果であり、正に、地域の教育力である。

社会の中にある差別の現実、気になること、憤ること、悩んでいることなどを語り合い、それを声にしてつながっていくことができる場をつくることが、地域づくり、組織づくり、人づくりである。

会場から「時代や社会が変わっても、人と人のつながりの中で、教育や解放運動が育つ、その原点を大切にしたい」と届けられた声を、もう一度、胸に刻み、具体的な実践をどう展開していくのかを長野の地で深めていきたい。